慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	1950年代における知識人と民衆意識に関する社会史的研究
Sub Title	
Author	和田, 悠(Wada, Yu)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2004
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.58 (2004.) ,p.91- 94
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成15年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000058-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

けではなかった。かなりの数にのぼると推定される忌避者たちは，国の論理に疑問をもちつつも，正面からそれに向かい合うことはなかった。さらに多数の人が行ったであろう徴兵逃れ祈願という行為は，国の論理の枠からはみだすものではなかった。近代日本における国（権力）と個人の緊張関係に焦点をあてたとき，国の論理の圧倒的な支配と論理をもたない抵抗，という図式が浮かび上がってくる。抵抗の論理を持たない人々は，組織的な抵抗運動をくり拡げることはなかった。しかし，徴兵逃れ祈願の流行は，多くの人々が徴兵に対する嫌悪を共有していたことを，また，多数の兵役忌避者の存在は，確かに抵抗が行われたことを物語る。こうした考察にもとづき，今後は官公庁史料，新聞・雑誌記事，関係者からの聞き取りなどを通して，依然として不明の部分の多い兵役拒否，兵役忌避，兵役逃れ祈願に関するデータの収集をすすめるとともに，このような権力関係（国の論理の支配と論理のない抵抗）が形成される過程にも注目していきたい。

引用および参考文献

安部知二『良心的兵役拒否の思想』1969 岩波新書.
加藤陽子「反戦思想と徴兵忌避思想の系譜」『近代日本文化論 10 戦争と軍隊』1999 岩波書店.
菊地邦作『徴兵忌避の研究』1977 立風書房.
喜多村理子『徴兵・戦争と民衆』1999 吉川弘文館.
同志社大学人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究　キリスト者・自由主義者の場合』1～2 巻 1978 みすず書房.
日本友和会『良心的兵役拒否　その原理と実践』1967 新教出版社.
ボウルトン D.・福田晴文ほか訳『異議却下　イギリスの良心的兵役拒否運動』1993 未来社

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

1950年代における知識人と民衆意識に関する社会史的研究

和　田　　悠*

研究課題の設定

社会学において，戦後日本社会が歴史的な視点から論じられる場合には，1945年から60年までが「戦後復興期」として一括され，1960年から1975年までが「高度成長期」として時期区分されることが多い。そもそも時期区分とは，研究における課題意識によってなされるものであるが，社会学においては，主として「市民」意識とその成立に焦点があてられ，「60年安保闘争」が一つの戦後の画期的な事件として扱われる。そこでは，「60年安保闘争」は，「戦後民主主義」による「戦後啓蒙」を前提とするものであり，後のベトナム反戦運動といった「市民運動」へと接続される，国民による主体的な政治参加としての位置づけられる（たとえば，石田雄『日本の社会科学』東京大学出版会，1984年を参照）。

それに対して，近年の研究動向は，こうした時期区分とそれに伴う戦後日本認識＝歴史像を更新しようとするところにあるといってよい。こうした動向の背景には，一定の時間的な経過があり，歴史的な「対象」として，戦後日本社会を具体相において実証的に検討しようとする歴史的な条件が生じたことがあげられる。さらに，1990年代に入ると，日本社会は経済的には新自由主義的に，思想的には新保守主義的に再編成されていく。こうした過程は，戦後日本の市民社会的統合の解体および「戦後」的価値の

自明性の喪失を意味していた。そうして初めて,「戦後」は検討の対象になったと言えるだろう。

近年の戦後日本社会の歴史像を更新しようとする研究の潮流をキャッチフレーズ的にまとめるならば,「1950 年代社会論」と言いうる。それは, 1950 年代の日本社会を, 占領期と高度成長の過渡期としてではなく, それ自体として,「一定の普遍性を持つ固有な社会」(雨宮昭一「一九五〇年代の日本社会」, 同『戦時戦後体制論』岩波書店, 1997 年) として把握する視座であり, 歴史学における現代史研究の進展によって生まれたものである。そして, こうした視座は (歴史) 社会学の領域においても受け継がれることになる。小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉』(新曜社, 2002 年) が書かれたことの意味の一端は,「民主」と「愛国」の総合として出発した戦後思想が, 1950 年代に多様な展開を遂げて, さまざまな試行錯誤がなされた歴史的事実を読者に確認させることにある。本研究もまた, 戦後思想を 1950 年代の日本社会の脈絡で検討するという点で, 近年の研究動向のなかに位置するものである。ただし,「知識人と民衆意識」という視角で, 知識人の啓蒙思想の構造的問題を考察しようとするところに, 本研究に固有の視点を設定した。

戦後啓蒙についての議論について言えば, これまでの研究では, 戦後啓蒙主義から市民主義へと転換するさまが連続的に語られる傾向にあったために, 論壇レベルで活動した知識人にとって, 戦後啓蒙を克服する経験的地盤をどう獲得, 発見されてきたのか, 民衆との関係性のなかで知識人の自己認識構造はどのような変化を遂げたのかという問いかけがなされてこなかった。戦後啓蒙の反省が問われる場合には, 大牟羅良や山代巴といった草の根的なレベルで活動した知識人が扱われてきた。それに対して, 本研究は, 論壇レベルの知識人に焦点をあて, 1950 年代において「戦後啓蒙」をどのように反省し, 新しい立場へと転生したのか, あるいはしえなかったのかを明らかにすることを課題とした。

研究内容の概要

このような問題を解くのに, 本研究で着目したのが, 1950 年代の日本社会で展開した生活記録運動である。この運動は, 知識人とは区別される層としての「ひとびと」が「生活」を書くことで, 自己を表現し始めたという点で, 戦前とは異なる戦後に固有の文化運動であった。戦後日本の知識人にとっては, 1950 年代の文化運動との遭遇は, 民衆との関係性において知識人としての自らの立場, 思想を問い直す契機ともなっていた。もっとも, 知識人による民衆の啓蒙それ自体の価値がこの時代にあっては放棄されることはなかったが, 戦後初期の素朴な啓蒙主義に対する一定の批判や反省をもとに, 知識人と民衆の結合の新しいスタイルが論壇知識人にとっての主題となった時期であった。

同一の文化運動に着目するにしても, 運動との「距離」のとり方や対象を見るまなざしによってその理解は異なる。生活記録運動の性格をどのような文脈のなかで位置づけ, 知識人としての自己を認識するのかには知識人の問題意識や個性が顕れる。本研究では, 当時の生活記録運動とかかわった多くの知識人のなかから, 鶴見和子 (1918 年〜) の生活記録論を主としてとりあげ, その理解の補助線として, 同じ時期に生活記録運動に着目していた野間宏 (1914〜1991 年) の議論もとりあげることにした。

はじめに, 鶴見も同人であり, 主要な書き手でもあった雑誌『思想の科学』の 1946 年の創刊から 1950 年代までの軌跡を追うことから始めた。そのことを通して,「知識人」がいかに「民衆」と出会うのか, すなわち「啓蒙」構造の反省が思想的課題となった経緯を歴史的に明らかにした。「思想の科学」研究会は, 当初は「思想と実践の各分野に, 論理実証的な研究を採り入れる事を, 主なる目標」(「創刊の趣意」) としており, その一環として大衆文化研究が位置づけられた。そこでは, 知識人が大衆を「異

文化」として分析する態度がとられていた。しかしながら，このような民衆への接近は，「思想家の集団が民衆からはなれた別のところにあって，そこで思想が組み立てられ，それが民衆に配給されるという考え方」(『芽』1953年1月，「発刊のことば」) にもとづく自己を含まざる「啓蒙」的な態度として，50年代の「思想の科学」研究会にとっては，批判，克服の対象となったことを明らかにした。

次に，鶴見和子の生活記録論を検討した。戦後日本思想史，文化史の叙述において，鶴見和子は生活記録運動にかかわった知識人として参照され，その実践は，一般的に「暮らし」「生活」に根ざしたものとして「市民主義」に接続されるものとして評価されてきた（鹿野政直『日本の近代思想』岩波新書，2002年)。しかしながら，1950年代の脈絡において，〈生活の組織化〉を支えている思想と〈表現された思想〉を峻別して鶴見の生活記録論を検討することで，生活記録運動のなかで現に生じている具体的な民衆とのつながりのなかの矛盾や葛藤をみすえることが出来ずに，知識人としての立場性を問われることがない特権的な場所で，観念的な反省を繰り返す鶴見の姿を浮かびあがらせた。

生活記録運動の理論的支柱であった鶴見和子の生活記録論は，1950年代の三重県東亜紡績楠泊工場文学サークル「生活を記録する会」の活動に着目して理論化したものであった（生活記録論は，『鶴見和子曼荼羅Ⅱ 人の巻』藤原書店，1998年にまとめられている)。鶴見にとって生活記録とは「よりよく生きるために書くこと」であり，「自己改造」のための教育的手段として位置づけられていた。同時代的な思想的文脈を踏まえると，鶴見のいう「自己改造」とは，抑圧体系であった封建的遺制である「家」から解放されて，近代的自我を確立すること，すなわち「あたらしい女性」になることであった。そして，この課題と苦しみを共有しているという点で，鶴見は「女工」に対して全面的な共感を寄せ，「友だち」と呼びかけた。しかしながら，当時の「紡績女工」は結婚や性，家族といった具体的な生活問題に直面し，教育経験からいっても，その実態は，鶴見とは異なる世界で主体形成を遂げた「他者」であり，「友だち」ではなかった。

1950年代の文化運動は，知識人が民衆意識を研究するさいに「語る主体」と「語られる客体」をどう一致させていったらいいのかという，現在で言う他者表象の問題を提出していたが，鶴見による「仲間」や「友だち」という集合的な他者表象とそれに対応する自己認識構造は，知識人としての自らの社会的な立場性を不問にし，啓蒙する側とされる側の関係性の問題に焦点をすえながらも，それを動的な過程として認識することを許さなかったのである。本研究の一つの核心は，社会認識から切り離されたという意味で観念的であり，知識人としての他者性を欠いた鶴見の思惟様式を，1950年代という時代のなかで位置づけたことにある。

ところで，鶴見と同時代に生活記録運動にかかわり，自らの思想的立場を作り上げた作家・知識人に野間宏がいる。野間は『真空地帯』の作の著者として，全体小説を主張した作家として一般には知られているが，「国民文学」運動を押し進める立場から，生活記録運動に関心を寄せ，自身も地元で文学サークルにかかわりながら，文学理論や社会認識を探求してきたことは現在では意外に知られていない。野間にとっては，生活と文学とを切り離し，反俗的な真善美を求めるような「封建的な文学」ではなく，読者の生き方の指針となるような，「生活のなかに深くから人間のうちに生まれてくる要求にこたえる文学」へと日本文学の改造することが1950年代の課題であった。こうした問題意識から，生活記録運動が着目された。野間は，1953年に日本文学学校を設立し，自らも講師として若い労働者や学生たちに，文章を書くことを指導し，地元では詩のサークルをもっていた。さらに「ひとびと」の生活記録や小説が寄せられた文学雑誌『文学の友』・『生活と文学』の編集長をつとめ，誌面での創作批評も行って

いた。こうした運動のなかで紡ぎだされた野間の生活記録論は，作家という専門性の立場から，民衆が生活を「書く」ということのもつ意味を本質的に解き明かしたものであり，鶴見のそれとは異なり，論としても本格的な検討に値するものであることを明らかにした。

反省と今後の課題

本研究は，1950 年代における知識人の啓蒙構造とそれを支える思想に照準を合わせて歴史的に検討することで，当該期の日本社会に固有の意味を見出そうとした。しかしながら，論文や学会報告という形で課題意識が表現されたもの（「1950 年代における鶴見和子の生活記録論」『人間と社会の探求』第 56 号，2003 年，「野間宏の生活記録論」日本社会教育学会第 50 回研究大会自由研究発表，「「生活記録」論にみる知識人の自己認識構造――1950 年代における鶴見和子と野間宏」社会文化学会第 6 回全国大会自由論題報告）を自己点検する限りでは，必ずしも 1950 年代の社会・文化に対する歴史像を十分には提示しきれず，批評的な思想論的な性格が強くなっている。その意味で社会史的研究として成立仕切れていない。

その原因の一端は，「知識人」の概念を本研究では自明のものとして議論し，啓蒙主義の反省の問題は，知識人と民衆の「出会い」の問題として議論した点にある。知識人と民衆の「出会い」といったときに念頭においていたのは，近年の教育学で展開されている「おとなは子どもと出会えるか。子どもはおとなと出会えるか」（竹内常一）という問題であった（拙稿「「学級づくり」の社会学的考察―ある小学校教師の総合学習の実践を事例にして」『現代のナショナリズム――哲学的な解読』青木書店，2003 年も参照）。知識人と民衆の関係性を考える上で，教師と子どもの関係性を鏡にすることの意義を否定するわけではないが，歴史研究として成立させるためには，啓蒙思想と社会構造との関連性を検証することが，対象に即してなされる必要がある。知識人による「言説」を成り立たせる根拠を歴史過程とかかわらせて論じる方法的工夫や対象の設定を行い，歴史叙述を行うことが今後の課題である。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

エスニシティと暴力の記憶

――アッサムの反外国人運動におけるアイデンティティの構築――

木　村　真　希　子*

1.　研究の目的

本研究の目的は，インドのアッサム州における反外国人運動がエスニック集団間関係に及ぼした影響を考察することである。アッサムでは 1979 年から 1985 年まで，主にバングラデシュ（旧東パキスタン）からの不法移民に対する大規模な反対運動が起きた。この運動は学生団体によって指導され，運動の方法は非暴力・平和主義をとった。しかし 6 年間続いた運動の中では多くの嫌がらせや暴力事件が発生し，特に 1983 年に中央政府によって強行された州議会選挙では多くの死傷者がでた。

アッサムはこの運動が起こる以前の 1970 年代後半までは，武力紛争や独立運動の多いインド北東部の中では比較的平穏であり，インド国民国家に統合されていると思われていた。しかし，運動の指導者